

書籍紹介

# 思いどおりになんて育たない

## 反ペアレンティングの科学

アリソン・ゴプニック 著 渡会圭子 訳 森口佑介 解説  
森北出版 総321頁 2019年発行 2200円+税

松 島 暢 志

書店で育児や保育のコーナーに行くと『○○な子の育て方』、『こうすればうまくいく○○』などのような、いわゆるハウトゥー本が多く並んでいることに気づく。インターネットショッピングサイトamazonの育児・保育のカテゴリも同様である\*1。それだけ親や保育者が悩みを抱え、答えを求めているという証左でもある一方、その内容は科学的な根拠に乏しく、むしろ個人の経験に基づいた、しかし読者にとっては「わかりやすい答え」を提供するものも多い。十年余り親子や保育者を対象に発達相談をしてきた筆者も、「早くに○○を習わせると将来に良いですか?」、「叱るのはダメなのですか?」などの具体的な方略の是非に関する質問をいただくことがある。そのたびに科学的に確かな知見に基づいて答えようとして明瞭な回答にならず、双方割り切れなさを感じることが多い(そのような相手は往々にして、次に会った際には、ハウトゥー本やインターネットで“発見”したわかりやすい答えにスッキリしており、筆者側はさらに不全感を抱えることになるのだが)。

◇ ◇ ◇

本書はカリフォルニア大学バークレー校の心理学と哲学の教授であるアリソン・ゴプニック(Gopnik, A.)博士が、世にはびこる「ペアレンティング」に対して異を唱えるべく執筆した本である。ペアレンティングは、親(parent)という名詞の末尾に、本来は動詞を名詞化する

“ing”を加えた造語であり、現在は広く使われる用語となっている。ペアレンティングは一般的な養育を意味することもあるが、ゴプニック博士が本書で取り上げているのは、20世紀後半から広まった「親がなすべきこと」という子育ての規範に関する考え方である。それは、子どもを何とかしてより良い大人、より幸せな大人、より成功する大人に育てるために親がなすべきことであり、文字通り「親する(parenting)」という“仕事”である。正しいペアレンティングを知り、そのテクニックを実践する／しないで子どもの成長は大きく異なると、世のハウトゥー本は助言しており、多くの親はそれを鵜呑みにしている。それに対してゴプニック博士は、心理学だけでなく、哲学、文化人類学、脳科学、生物学、ロボット工学、さらには日本の禅話なども引用しながら、多角的に反論する。科学の視点から、巷の子育てに関する「べき論」を、根拠に乏しいもので根本的に誤りだと論じる。

◇ ◇ ◇

それでは本書の構成と内容をかいつまんで紹介しよう。本書の原題は“The Gardener and the Carpenter”、日本語訳すると『庭師と木工職人\*2]である。ペアレンティングの規範に基づく、親は材料を手順通りに組み立てて、頭に思い描いていた構想と同じ形にさせる木工職人のようなものとされる。職人としての腕前

は、出来上がった作品を見て評価される。一方でゴブニック博士は、親は庭師のようなものであり、子どもという植物が育つための土壌づくりをし、苗を植え、水やりをする存在だという\*3。庭師がどれほど細かく計画し実行しても、植物は思い通りに育ってはいくれない。芽吹くことがなかったり、成長途中で病気にかかることもある。しかし偶然にも思ってもみない育ちをする植物もある。それらを見ることは庭師としての醍醐味であるだろう。本書の「イントロダクション」には、親の仕事はある決まったタイプの子どもの育てることではなく、何をしでかすかわからない様々なタイプの子どもの元気に生きられるよう、愛と安全と安定がそなわる保護された空間を与えることと主張されている。

第1章「ペアレンティングに異議あり」では、まずペアレンティングというものを、それが生まれた経緯から概説し、論理的に否定する。もしペアレンティングの考えが正しければ、多くの遺伝子が共通であり、同じ親に育てられるきょうだいはとても似るはずだ。しかし実際には、きょうだいは思った以上に違うことを、科学研究の結果を引き合いに出さなくとも私たちは経験的に知っている。それは非共有環境（出産前の影響や事故や病気のような偶然の出来事などの、遺伝子や同じ家庭で経験する共有体験以外の要因）が、子どもが大人になるかに大きな影響を及ぼすからだ、行動遺伝学では考えられている。換言するなら、人間の発達には多様性と変化がつきものである。子どもは非常に乱雑な存在であり、親は彼らに探索できる安全な場を与える（そして時には子どもにさらに探索させるために散らかす）ことが求められる。

第2章「子ども時代の進化」で主に述べられているのは、「人間は子ども時代が長い生物」ということである。魚類や他の哺乳類より長いのはもちろんのこと、進化的に近い類人猿（チンパンジーやボノボ）と比べても人間の子どもの時代は長い。つまり人間の子どもの時代はそれだけ親の世話を必要とする、手がかかる存在だということの意味する。晩成の生物にとって親の存在

は重要であり、この長い子ども時代は学ぶための時間である。ただし、子どもの学びはただ親の言うことを聞き、親の行動を真似るだけではない。物理的にも社会的にも生活環境は絶えず変化をするため、前の世代がしていたことをそのまま真似ていただけでは全く進歩はないからだ\*4。生物学的にも文化的にも、変革と模倣のバランスが求められる。それぞれの世代が、前世代と少し違った世界で育ち、また少し違う世界を作るといふ乱雑さのおかげで、人間は常に変化を続ける環境の中で生きることができる。そして親は、未来の子どもがどんな姿に成長するかは分からないものなのである。

第3章「愛の進化」では、前章で述べた人間の長い子ども時代を、愛という観点でさらに考察する。ここでは人間と他の霊長類を分ける3つの関係として、「つがい（夫婦）の関係」、「祖母と孫の関係」、「アロペアレント（仮親）の関係」が挙げられた。まず人間（とテナガザル）以外の動物は、性交渉を持つつがい生活をして一緒に子どもを世話することがほほない。そして人間の持つこのつがいの絆は、父親の育児参加と高い相関関係がある。人間のように手がかかる子どもを長く世話をする際に、父親が参加することは利益になる。また人間は、年老いて生殖能力を失ってからも生き続ける珍しい生物である（哺乳類で他にはシャチのみ）。ここではホークス(Hawkes, K.)の「おばあちゃん仮説」を引用し、繁殖力を失った後に孫の世話をするのが自らの遺伝子を広げる可能性を高めること、そして祖母（と祖父）が手のかかる子どもの世話に手を貸すことができることで親の助けになることを示している。さらに人間は血縁のない子どもでも世話をするようにできている。集団の中で親以外に育児を引き受けるアロペアレントがいることで、親は大変な育児から一時的に解放される\*5。母親は自らの胎内にいた赤ちゃんに対して愛を向けることができるが、父親、祖父母、アロペアレントも赤ちゃんを世話することでオキシトシンのレベルが上昇し、温かい感情が生まれる。子どもを愛しているから世話をするのではなく、世話をするか

ら愛するようになるのである。

第4章「見て学ぶ」と第5章「耳から学ぶ」は、子どもの学習についての概説になっている。本書で批判されているペアレンティングの規範では、子どもの学習を親が意識的にコントロールすべきと主張する。しかし、親の“指導”によって子どもは適切な知識とスキルと行動を学習するという、学校教育と相似形のその考えは、実際は最新の科学的知見とは一致しない。子どもは学校のような教育よりも、社会的学習\*<sup>6</sup>を用いて、見て学び（観察学習）、聞いて学ぶ（証言学習）。まず、人間は他者を模倣する\*<sup>7</sup>。子どもは特に、面白いこと、他者が意図的にした行動を模倣し、効率的に観察学習をする。大人より子どもの方が優れた観察学習者となることもある。さらに興味深いことに、人間の子どものは単に模倣するだけでなく、相手がその分野の専門家である際には、不必要かもしれない細かい部分まで過剰に模倣することもある\*<sup>8</sup>。ペアレンティングのマニュアルでは、親はすべき一連の行動を決めておき、子どもに向けてその行動をすることが正しいとされる。しかし子どもにとっては、何かを上手に行っている親や他人を観察し模倣すること自体が学習になる。正しいことであろうとなかろうと、他者の行動を観察することで、子どもは世の中に多様な人がいることを学ぶ。親にとって大事なことは、子どもに正しいことだけを見せるのではなく、何かを子どもと一緒にやることである。

また、人間の子どものは他者の発言からも学習する。そして誰の発言から学習するかには、子どもと情報提供者の関係が影響する。親子に安定した愛着関係が築かれていれば、子どもは親の発言を信頼し受け入れる。他にも子どもが他者を信頼する要因は、近年の多くの発達研究から明らかにされている\*<sup>9</sup>。「子どもはスポンジ」だと良く言われるが、何でもかんでも吸い込んでしまうスポンジではない。どの人が信用できるか、疑うべきなのかを、かなり早期から判断できている。また、子どもは大人に向かって繰り返し質問をする。子どもの質問は大人にかまってもらいたくて会話を引き延ばしているの

ではなく、純粋に納得する答えを聞いてそこから学びたいためになされる。1時間に平均75前後の質問をするという子どもは好奇心の塊で、大人から教えなくても自ら学ぼうとする。親は子どもの「なぜ」に耳を傾け、「なぜ」に答えることが重要となる\*<sup>10</sup>。

第6章「遊びの役割」では、従来強調はされてきても十分な科学的根拠のなかった、子どもの発達における遊びの重要性を取り上げる。ラットでの研究ではあるが、取っ組みあったり転がったりという荒っぽい遊びや、玩具での遊びによって、脳が柔軟で可塑的になることが示されている。また、ごっこ遊びや空想遊びによって、人間の子どものは現実とは異なる視点を持つことが促進され\*<sup>11</sup>、他人の心を理解する能力、すなわち心の理論を身に付けることにつながる。さらに、変化する環境に柔軟に適應するロボットを作る際には、なんとロボットに“遊ばせる”（ランダムに違う動きをして、その結果をロボット自身に分析させる）ことが最も効果的だそうだ。しかし残念なことに、ペアレンティングの規範に従う親は子どもの遊びの妨げになることがある。“先生”のように振る舞うことで、逆に学習を抑制してしまう。親に望まれることは、子どものための足場づくり\*<sup>12</sup>である。親は遊びに加わっても構わない。遊びは大人にとっても楽しいものである。

第7章「成長する」では、児童期から青年期の学校教育に焦点が当てられる。この時期は、幼児期までの新しいことを学ぶ発見学習ではなく、特定の目標を完璧に身につける完全習得学習が求められる。そしてゴブニック博士は、現在の学校教育もペアレンティングと同様に、科学的に間違った概念に基づいていることが多いと主張する。決まった形の大人に育て上げることが教育の目標とし、そのためにテストが重視される。しかし特定の目標を志向することは、一方で多様性の妨げにもなる。教室で教師の言うことに注意を向け、気をそらさない能力などの「学校が求めるもの」に適應できない子どもは、病人や障害者のように扱われてしまう。また、思春期に入ると再度乱雑さが戻って

きて、幼児期同様に脳が劇的に変化する。そしてこれらの脳の変化は、様々な経験によってもたらされる。守られた状況である家庭から抜け出して、自分自身で何かを起こす時期である思春期では、親は一步引いて子どもの自立を見守ることが重要になる。

第8章「未来と過去：子どもとテクノロジー」では、現在日本でも議論されているデジタルメディアとの付き合い方について述べられている。第2章にもあったように、環境は常に変化するため、前の世代の模倣をするだけでは不十分で、新しく何かを付け加えていくことが重要だ\*13。そしてテクノロジーの変化は、前の世代には予想がつかない。デジタルメディア等の新しい技術に対して親が怖れていることのほとんどには根拠がないことも示されている\*14。大人になってから新しいテクノロジーを学ぶと、常に意識的な集中を必要とし疲労する。一方で生まれた時からデジタルメディアに接している子どもは、大人の文字を読む能力のように当たり前のスキルとして身に付ける。ここで注意が必要なのは、技術のイノベーションには伝統も必要であるということだ。「本」や「読む能力」といったような旧世代のテクノロジーやスキルがなければ、新しいものへは移行しない。もちろん新しい世代が、それらをそのまま模倣するべきとは考えないほうが良い。

第9章「子どもの価値」は倫理の側面から主張が展開される。古典的なミル (Mill, J. S.) の功利主義とカント (Kant, I.) の義務論は、どちらも親が行う子どもの世話という行動原理を規定できない。むしろミルやカントとは逆の、バーリン (Berlin, I.) の価値多元主義 (様々な道徳的価値があり、互いに矛盾することもあるが、それらを比較できないし、何が優れているかということもできないとする考え方) の方が適していると本書は述べる。特に母親は、子どもをもった後のことを、子どもをもつ前に決定しなければいけないわけで、そこに合理的な意思決定を行うことは難しい\*15。絶対的に一番良い決定というものではなく、そこから生じる罪悪感や後悔、そして安らぎを受け入れる必要が

ある。



私の子ども育て方は正しかったの。子どもたちの人格形成に私はどんな影響を与えたのか。それを振り返ってみて、私はこうした疑問自体が不適当だったと強く感じている。(p270-271)

本書で繰り返されているのは、「子どもが成長して大人になった時の価値で、子どもを世話することの価値が測れる」という、木工職人的なベアレンティングの価値観の否定である。親と子の関係は唯一無二のものだと考えるべきだと、ゴブニック博士は主張する。確かに「親する (parenting)」とは不思議な言葉である。私たちは誰かと友達となる時に、初めて会った時より相手が幸福かという「友する (friending)」という基準では評価はしない。夫婦は、相手の性格が結婚前より良くなったかという「妻する / 夫する (wifing, husbanding)」の仕事で評価されることもない。またそのような用語もない。ただ、友だちであり (being friend)、妻 / 夫であり (being wife, being husband)、相手をもっと愛したいと望むだけである。親であることだけが、仕事でなくてはいけないという合理的な理由はないだろう。

本やインターネットサイト、SNSで玉石混交、様々な子育てのマニュアルが蔓延し、親や親子備軍がそれらに振り回されている現状に、本書は警鐘を鳴らす。ゴブニック博士の望む親像は至極シンプルである。子どもたちが自分であれこれ試し、失敗し、学び、成長することのできる、安全で安心な環境を作る、いわば庭師のような振る舞いを親がすることが大事である。この主張は、子どもが求めた時に正しく大人が応答するという「情緒的利用可能性 (emotional availability)」(エムデとソース; Emde & Sorce) が重要ということでもあるだろう。大人が子どものために何でもするような先回りや過干渉は、良い関わりとは言えない。子どもの状態に「敏感」でありながら、かつ「侵害的でない」ことで、大人は子どもにとって情緒的に

利用可能な存在になることができる。

親や保育者としては、子どもを前にして何もしないということは不安でもあるだろう。何かした方が育児や保育を“した気”になれる。しかしそれは単なる自己満足であると言われても否定はできない。目標を持ち、そこを目指すこと自体は悪いことではないが、目標通りにするために支配的に子どもに関わるのではなく、適切な距離をとりつつ、支援的に子どもに関わることが望ましい。



以上が本書の概要である。「紹介」という範疇を超過してしまった気がしないでもないのは、筆者の表現力の不味さに起因するだけでなく、本書の内容が非常に濃密で有意義だからであろう。論拠とする科学的知見が多岐に渡っており、内容的に大学生、短大生が十分に理解するには難解だということは否定しない。しかし「わかりやすい答え」は根拠が乏しいからこそわかりやすい。わかりやすいものだけを取り入れると、結果として科学的に間違っただけに飛びついてしまうことになる。

本書の主張に倣えば、理解しようと挑戦した結果、理解できなかったという失敗は、それでも一つの大事な価値である。「本を読む」という旧世代のスキルも、将来の新しいスキルのためには必要である。保育者・教育者を目指す人たち、そして何より親や親になる人たちに、止まりながらも、ぜひ読んでほしい一冊であると、個人的には考えている。

#### 後註

- \* 1 アメリカのamazonのペアレンティングの部門にはこのような書籍が六万冊以上あり、その大半のタイトルにハウトゥーが入っているようだ。(p2)
- \* 2 訳者の渡会圭子氏によると、carpenterは「大工」と訳されることが多いが、家よりも小さなものを作ることをイメージして、本書では「木工職人」と訳出したとある。(p288)

- \* 3 子どもを植物に例える考え方自体はゴブニック博士独自のものではない。古くはフランスの教育思想家ルソー (Rousseau, J.) に始まる。村井実「教育思想」(1993年)にも「植物モデル」としての子ども観と「農耕モデル」としての教育観が論じられている。
- \* 4 親の世代のマニュアルにそって子どもを目標通りに育て上げることは良い方法とは言えない。世代間の変化は急速かつ大きいからだ。例えば現在20歳前後の子をもつ親の中には、娘や息子をYouTuberにする英才教育(そういうものがあるかは知らないが)を赤ちゃんの頃からしておけばもっと稼がせることができたのでは、と後悔している人もいるかもしれないが、それは無理な話である。動画作成者が広告で収益を得られるようになったのは2007年からで、彼らの娘や息子が赤ちゃんの頃にはYouTubeは存在すらしなかった。同様に、今赤ちゃんをもつ親が自分の子どもにYouTuberになるための英才教育をしたとしても、十数年後までYouTubeでの収益モデルがそのままだという保証はどこにもない。
- \* 5 保育や社会的養護という領域はアロペARENTの最たるものであろう。保育者や里親は血縁のない子どもの世話をする。また若い世代にとっては、他人の子を世話する経験は自分の子どもが生まれた時のための練習としても役に立つ。
- \* 6 社会的学習については、この「和顔愛語49巻」のトピックス(p42)でも取り上げたので参考にしてほしい。
- \* 7 模倣の話題になると「ミラーニューロン」という脳神経学の用語が取り上げられることがあるが、本書はこの用語を一般的に誤解されている「一種の神話」であり、注意すべきとも述べている。ミラーニューロンの存在はマクザルで確認されていることは事実だが、人間の模倣は単純なニューロンだけで決定されるもの

- ではなく、もっと複雑な相互作用から生じており、ミラーニューロンの研究者たち自身もそれを理解している。(p97-101)
- \* 8 過剰模倣 (overimitation) と呼ばれるこの行動は、何も考えず全ての行動を模倣したということではなく、実際は高度な知性を持つから生じると考えられている。自分が無知で、相手が専門家であることが分かっていたら、その専門家の一挙手一投足まで真似をすることには合理的な理由がある。またこの過剰模倣は、食事の作法などの儀式的行動にもつながる。儀式的行動そのものには意味はないかもしれないが、属している集団の一員であることを確認できるような、文化的意義は大きい。(p110-117)
- \* 9 この選択的信頼 (selective trust) に関しては、日本語では、展望論文「外山紀子. 幼児期における選択的信頼の発達. (発達心理学研究, 第28巻, 第4号, 244-263, 2017年)」に詳しくまとめられている。
- \* 10 ただしゴブニック博士は子どものすべての質問に答える必要はないとも述べている。一方で本書解説の森口佑介博士は、子どもの好奇心を奨励するためには、やはりある程度子どもの質問には向き合う必要もあるとも述べている。(p282)
- \* 11 遊び一般については、この「和顔愛語49巻」のトピックス (p43) で概説している。またごっこ遊びを含む子どものファンタジーに関しては、「和顔愛語47巻」のトピックス (p14) で取り上げたので参考にしてほしい。
- \* 12 足場づくり (scaffolding) とは、ヴィゴツキー (Vygotsky, L.) の発達の最近接領域に基づく考え方で、大人が子どものために知識を築くのではなく、大人が築いた足場の助けを借りて、子どもが自ら知識を築くということを意味する。つまり、正しい答えそのものを教えるのではなく、例えば遊びの中で大人が適度なほめかしをすることで、子どもの自発的な探索を導く。
- \* 13 心理学ではこれを「文化的ラチェット効果」と呼ぶ。ラチェット(テニスやバレーボールのネットを張る際に使われるような逆回転しないための歯止めのついた歯車)のように、文化は一つの方向に蓄積しつつ、徐々に修正されるということの意味する。
- \* 14 デジタルメディアと発達の関係 (いわゆる「スマホ育児」) は現在議論の最中の領域である。2018年のChild Development誌89巻1号では特集が組まれ、長時間のスマートフォン使用は睡眠などへの悪影響が出るという知見もあったが、この領域の研究はまだ不十分で、現時点で一概にデジタルメディアが悪いとも言い切れない。デジタルゲームの使用によって、ワーキングメモリーや実行機能、認知的柔軟性などの能力を促進するという研究もある。現代の子どもたちは当たり前のようにその環境の中にいるし、安易な善悪二極論は控えるべきだろう。解説で森口博士も述べているように、どのメディアが、どの程度、どのような影響を及ぼすのか、実証的なデータに基づいて考えていく必要がある。
- \* 15 子どもを産む前後で、(特に母) 親の人格は大きく変化するとされる。日本では、親発達に関する草分けの研究である「柏木恵子・若松素子 『親となる』 ことによる人格発達 (発達心理学研究, 第5巻, 1号, 72-83, 1994年)」に詳しい。